北辺の嵐

小田原金一

伝七異聞

津軽書房

北辺の嵐

伝七異聞

小田原金一

著者紹介

おだわら・きんいち

大正6年、青森市に生まれる。昭和12年、青森師範学校を卒業。現在、青森市立堤小学校長。昭和18年に応召、北満警備、牡丹江方面戦闘に参加、敗戦と同時にシベリヤに抑留されて昭和24年に帰国。著書は抑留体験記『永久凍土地帯』がある。

現住所　青森市新町1—11—13

北辺の嵐　新装版

昭和五十一年七月十五日初版発行

著者　小田原金一

発行者　高橋彰一

発行所　津軽書房

青森県弘前市品川町二八番地

振替／秋田二三七四番

電話／三三—一四一二番

印刷／小野印刷・製本／美成社

乱丁・落丁はおとりかえします

目次

南部領大畑村色見崎　5
武陵桃源の夢　60
飛驒屋蝦夷檜請負山　108
飛驒屋厚岸請負漁場　156
黒髪の紅毛人　200
久奈志利請負場所　291
彫琢鏤心の刀鞘　387
霧多布領納加麻布　425
あとがき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

北辺の嵐

伝七異聞

南部領大畑村色見崎

奥州南部領大畑村は、下北半島の外ケ浜に位置している。古来、羅漢柏（ひば）の積出と蝦夷地に渡る出稼者の渡海の湊として栄えて来たところである。

村の西北の方を大きな川が流れ、此の川を渉ると直ぐ崖になっていた。此の崖は、其の儘、のめり込むように海に没し、村の人は、此の崖の突端を色見崎と呼んでいた。此の色見崎の南には、蝦夷人の城砦の跡があり、北の方には海を隔てて蝦夷地を望むことが出来た。

色見崎の突端に、屋根を羅漢柏の樹皮で葺いただけの掘立小屋があって、其処に見張番人の文治がいた。文治は、陽のある間、雨が降っても雪が降っても、小屋を動くことはなかった。其の為に、文治の姿は、色見崎の巌に深く根をおろした、人の型をした石塊のように見えた。

南部藩田名部代官所大畑検断の役人は、朝、此の石塊を見て仕事に執りかかり、夕刻、また、此の石塊を見て其の日の仕事を終っていた。此の石塊のように動くことのない文治は、実は、村人は兎も

角、大畑検断にとっては眼を放すことの出来ない厄介な男であった。

1

文治が乗組んだ、奥州南部領宮古湊の廻船、十六反帆神力丸が、江戸に向けて南部領釜石湊を解纜したのは、寛延三年（一七五〇年）十一月十七日であった。

此の日は、冷い東風が、礫のような氷片を叩きつけて来る悪天候であった。神力丸の積荷の中には、鮭の塩引き、昆布、かずのこ、干鮑等の正月用品があった。其の為に、神力丸は、是等の品を、江戸の正月に、何としても間に合せなければならなかった。

神力丸は、解纜して間もなく、飛び散る飛沫のために、帆綱はむろんのこと、綱という綱が、悉く白く凍りつけられてしまった。

夜に入って東風が西風に変わり激しい吹雪となった。神力丸はやむなく仙台領外ケ浜に入って難を避け、十一月の二十四日、此処を出帆した。荒れ狂った風が、ぴたりと歇み、低く垂れ籠めた雪雲の切れ間から、一瞬ではあったが、碧い空が覗かれたからである。

神力丸は、午刻（ひる）を過ぎると、また、強い西風に襲われた。此の風は、軈て嵐と化し、雨を叩きつけたかと思うと、直ぐに雪を吹きつけて来た。夜に入って神力丸は漂（なが）され始めた。

神力丸の乗組員は次の八人であった。

船頭　　又五郎

オヤジ（水手頭）伝　六
オモテ（羅針頭）伊七郎
荷宰領　利兵衛
水手　利右衛門
水手　長　助
水手　五兵衛
水手　文　治

此の八名の中で、伝六は一番の歳かさで、文治は一番若かった。そして伝六と文治の二人は、南部領大畑村の出身であった。

此の八名を乗せた神力丸の甲板に、狂濤が幾度となく滝のように襲いかかった。神力丸は、東にも西にも漂され、木の葉のように翻弄された。雨に叩かれたかと思うと、吹雪にも襲われた。そして波頭のてっぺんに巻き上げられた次の瞬間、其の谷底に突き落された。其の度に、神力丸は、音を立てて、舷側が裂けるように歪み、船底が真二つに折れるように軋んだ。

「帆柱をきり捨てろ。」

船頭の又五郎が叱鳴った。だが、甲板に出て行く者はなかった。稍々あって、文治が命綱を自分の躰に固く結びつけ、もう一方の端を帆桁に縛りつけた。其の文治を、伝六が命綱をつけて支えた。

文治は、受口をつける為に、斧を振るった。併し、斧を振り上げた文治に、波が滝のように、而も、文治を撥ね飛ばすような勢いで襲いかかった。

「鋸だ。誰か、鋸を持って来てくれ。」
文治が呶鳴った。其の口に、容赦なく海水が流れ込んだ。まるで、塩水の中につかっているのと、変わることはなかった。
文治は、襲いかかる波の中で、鋸を挽いた。
帆柱は船が大きく傾いた其の方向に倒された。倒された帆柱は、一方の端を宙に立てたと見るや、あっという間に狂濤に呑み込まれてしまった。
船頭の又五郎が、また、呶鳴った。
「荷物を捨てろ。」
「待ってくれ。」
荷宰領の利兵衛が掣した。荷物を預る者としては、当然過ぎる程当然なことであった。又五郎は、飛沫で乱れた髪をかき上げ、
「荷崩れすれば、船は沈んでしまうだ。」
これまた当然なことであった。荷宰領の利兵衛もまた飛沫に髪を振乱し、大きな声で頼んだ。
「あと暫く、待ってくれ。」
「ならぬ。」
押問答に、伝六が割って入った。
「利兵衛。此処は海だ。船頭に任せろ。」
荷宰領の利兵衛は、口を閉ざした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

船頭の又五郎が指図した。

「荷物を捨てろ。半分だ。いいか半分だぞ。」

積荷は次々に海に抛り込まれた。酒樽も抛り込まれた。文治は、海に抛り込まれた荷物があげる不気味な飛沫の色を、是まで見たことがなかった。また、狂濤の中で帆柱を挽いた息の詰まるような鋸の音も、是まで聞いたことがなかった。恐らく、是からも、此のようなことはないであろう。

神力丸が、ようやく凪いだ海の上に乗ったのは十二月朔日であった。船頭の又五郎は、船オヤジの伝六に、帆桁で、代りの帆柱を急拵えさせ、それに八反帆を挙げさせた。舵の方は、幸い其の機能を保っていた。だが、船頭又五郎以下全員が烈しい疲労を覚えていた。

十二月に入ったというのに、暑い風ばかりが吹いて来た。神力丸は、既に方角を見失っていたのである。オモテの伊七郎は、五日置きに神籤を引き、神籤の示す方角に神力丸を向けた。併し、どう走っても、此処の海は夏であった。

神力丸は、此の何処とも知れぬ涯のない海の上で新しい年を迎えた。神力丸の暦では寛延四年（一七五一年）であった。

酒が出された。

「いいか、どんな事があっても力を落すんじゃねえぞ。船頭の言うとおりにしておれば、江戸にも着けるし、釜石にも戻れる。あの時化でも、神力丸は沈まなかった。此の船に乗っている限り、大丈夫だ。力を落すんじゃねえぞ。いいか。」

伝六が、みんなを励ました。

オモテの伊七郎は、新しい年を迎えたので新規蒔直しの神籤を引いた。そして、是まで、五日置きに引いていた神籤を三日置きにした。

神籤を引く度に神力丸の向う方角が変わった。それでも、相もかわらぬ暑い日ばかり続いた。文治は、海の水を汲み上げて頭からかぶった。だが、皮膚に塩を吹くだけで、少しも暑さ凌ぎにならなかった。灼熱した太陽と、其の熱を反射する海の光とが、文治の躰を四方八方から灼きつけていたのである。

何処の海なのか、星の位置も変わってしまった。見たことのない星だけが、中天いっぱい鏤められ、其のどの星も腕を伸ばせば、手の届くようなところにあった。それでいて、神力丸の方角を決めるのには、何の役にもたたない星ばかりであった。

積込んだ米は、とっくに食い尽していた。積荷の串貝、栄螺、干鮑、干鮹等を嚙み、一日に一回、決められたように降って来る驟雨を、口で受けるようにして飲んだ。また、此の驟雨を樽に貯めて味噌汁をつくって啜った。

「みんな生きて帰るんだ。今に、江戸にも、釜石にも戻れる。力を落すんじゃねえぞ。」

伝六は、みんなを励まし、眠ることなく神力丸の舵をとった。

併し、どう走っても、どう舵をとっても、行きつく所のない蒼い海ばかりが続いた。時たま、船よりも大きい鱶が、船の周りをぐるぐる廻ったり、信天翁が大きな翼で波頭を叩いて飛び立ったりした。

荷宰領の利兵衛が烏目に罹った。利兵衛は、積荷を海に捨てた時から、がっくりと力を落していた。正月になっても、江戸に神力丸が到着出来ないために、大きな衝撃をうけていた。荷宰領という責任からであろう。此の心労のためか、利兵衛の大腿部には暗紫色の斑点が腫みとともに出ていた。伝六

も烏目におかされた。夜も眠ることなく、舵をとり続けたことが、堪えたのであろう。
神力丸の夜の舵を、文治が伝六に代ってとった。其の裡に、残りの六人も次々に烏目に襲われた。夜は神力丸を波の上に漂わせておくほか、他にとるべき途がなくなった。
「いいか。力を落すんじゃねえぞ。」
伝六の声も、心なしか、うわずった空疎なものとしてしか響かなくなった。
船頭の又五郎は、日の出を拝み、船霊に伏拝し、神と仏に加護を祈った。文治は、寝たきり動けなくなった荷宰領利兵衛とオヤジ伝六の分も甲板に出て祈った。
不思議に、暑さが和らいで来た。一日に一回、決められたように襲って来る驟雨も降らなくなった。味噌汁を煮る水はむろんのこと、飲料水にも事欠くようになった。水が不自由になると、急に、船頭の又五郎と水手の長助、五兵衛、それから文治の脚まで、暗紫色に腫み出した。どんなことをしても沈まない神力丸と看てとった死神は、今度は一人一人の命に襲いかかって来たのである。
二月二十五日未明、申未（西南）の方角に島影を発見した。地平線上に少し盛上がった、其の島は薄墨を流したような形であった。
「オヤジ！　島だぞ。島だぞう！」
文治は叫んで、寝ていた伝六を背負って再び甲板に出た。伝六は、穴のあく程見詰めた。
「うん。島だ。助かる。」
伝六は、自分に言い聞かせてから呶鳴った。
「みんな力を出せ。助かるんだ。」

荷宰領の利兵衛は、長助に背負われて、船倉から出て来た。利兵衛の瞼にはきらりと光るものがあった。

考えて見ると、南部領釜石湊を開帆してから三か月を越す月日が経っていた。此の間、唯の一度も島も陸も見ることなく、死神だけにとり憑かれて来たのである。そして此の死神は誰彼の区別なく一人一人の躰の奥深くに住みついてしまった。今こそ、此の死神を追い出し、突き放し、二度と自分の躰に近づけてはならないのである。船頭の又五郎は、オヤジ伝六に代って舵を握っている文治に、

「急げ。」

と、力強く指示した。

陽が高く昇った。こんなに華やいだ陽を、是まで見たことはなかった。其の途端、島影は消えた。それっきり、二度と其の姿を現わすことはなかった。島影と見たのは、地平線の後方に懸った雲であったのである。

荷宰領の利兵衛が、寝たきり立てなくなった。船オヤジの伝六も立てなくなった。雲を島と見誤ってから、急に衰えはじめたのである。

船頭の又五郎は、残っていた酒をみんなに振舞った。此の酒は、何を意味するのか、誰もが判っていた。だが、それを口に出して言う者は、一人もいなかった。言えるものでもなかった。船オヤジの伝六も一言も言わなかった。

神力丸は、病人を乗せた儘、潮の流れに、其の針路を任せた。海は涯もなく続いた。

神力丸の暦で三月三日の朝、文治は小用で甲板に出た。尿は茶褐色に濁っていた。顔を上げると、

申酉（西南西）の方角に、黒い影が、幽かに見えた。
「島だ。」
文治は、眼を凝らした。そして弾む胸を抑えた。一度、雲を島と見誤ってからは、自分の眼を信じることが、出来なくなっていたのである。況して、烏目に罹っている眼である。夜が明けたとは言え、まだ、物の判別がはっきりしていないのかも判らない。文治は、陽の昇るのを確かめ、幾度も、黒い島影を確かめた。此の後で文治は、船倉に寝ていた船頭の又五郎に報らせた。又五郎は、甲板に這い上がって来て目を凝らした。稍々あってから言った。
「オヤジを連れて来てくれ。」
船頭も慎重であった。
文治の背中に負われた伝六は、
「確かに島だ。ひょっとすれば陸地かも知らんぞ。」
と、言って、甲板に身を横たえた。
又五郎は「兎も角、あれに舵をとれ。」と文治に指図した。
文治は、申酉の方角に、神力丸を向けた。八名の生命を乗せた神力丸は、文治のとる舵棒の方向に向って進んだ。此の方向だけに、八名の生命が懸っているのであった。
此の日、文治は、陽が涯のない海に落ちても、舵棒を握った手を放さなかった。此の舵を、二度と死神にとられてはならないのである。夜が明けると、黒い陰が、行手一ぱいに展がっていた。山も見えた。

「おおい。みんな起きろ。陸地だ！」
文治は、大きな声を張り上げた。泪が、次から次へと流れ出て来た。
伝六が、自力で船倉から這い上がって来て、其の陸地を見た。長助に背負われて船倉から出て来た荷宰領の利兵衛が、
「みんなに迷惑をかけたな。」
御辞儀を幾度も繰り返した。病気が進んでいるらしく、顔まで腫んでいた。
船オヤジの伝六が、
「文治、これからは、お前が俺に替れ。船頭に言っておいたからな。」
文治は、其の責任の重さを感ずると共に、水手としての誇りをしみじみと感じた。同時に、豪気な伝六が、急に弱音を吐いたので、何か不吉な予感がした。だが、其のことを深く考える時間を持っていなかった。何としても、船を狂いなく陸地に向けなければならなかったのである。
文治は、此の日の酉刻（午後五時）、散在する小島の間を縫うようにして、神力丸を陸地に近づけた。
此処の海は、浅かった。其の為に、神力丸を着岸させることは出来なかった。併し、十二、三艘の小舟が、直ぐに近づいて来た。どの男もてっぺんだけ高い菅笠を冠り、白い服を着て白い股引を穿いていた。菅笠を脱いだ男を見ると、髪の毛を、全部頭のてっぺんに結い上げ、其の束髪を鼠の尻尾のように細く長く、後に垂らしていた。
小舟には、細く割られた竹で編んだ籠が積まれていた。網も積まれていた。恐らく、此の国の漁師

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.